

## 平成 23 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること)

スポーツをしている児童・生徒の栄養・食生活の評価に関する検討

学位の種類: 修士 (健康科学)

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻

ヘルスプロモーションサイエンス学域

学修番号 10899602

氏名: 大滝裕美

(指導教員名: 稲山貴代)

**【背景・目的】**

本研究ではスポーツをコミュニティに所属する小学生、中学生、高校生を対象として、枠組みに照らし合わせて食生活を評価しその特性を明らかにすること、QOL と関連する食生活要因を明らかにすることを目的とした。調査 1 は地域におけるスポーツクラブの役割である生涯スポーツの推進という観点から、地域の少年団・クラブに所属する小学生を対象にした。調査 2 は選手の強化・育成の推進という観点から、競技レベルの高い小学生・中学生・高校生を対象にした。あわせてセルフ・エフィカシーや結果期待の尺度の検討を試みることも目的とした。

**【調査 1: 方法】**

サッカー少年団・クラブの小学 4~6 年生 81 名(解析対象者:75 名、有効回答率 93%)を対象とした。自記式質問紙調査の枠組みの構成概念は QOL、健康・栄養状態、行動、中間要因、準備要因、属性、食環境、運動と栄養との関わりとした。QOL と食生活要因との関連は QOL を従属変数とし、他の食生活要因との関連を二項ロジスティック回帰分析にて検討した。

**【調査 1: 結果】**

調査の結果、QOL や食べる行動、主食に関する準備要因、食環境は良好であったが、食事づくり行動や食情報交換・活用行動の積極的な回答は少なかった。また、QOL にセルフ・エフィカシーや運動後の栄養補給といったスポーツ活動と関わりのある行動が関連することを確認した。

**【調査 2: 方法】**

対象は J クラブ育成チームの小学生から高校生および県大会ベスト 8 のチームの小学生とした(調査対象者:小学生 59 名、中学生 114 名、高校生 76 名)。自記式質問紙調査の枠組みの構成概念は QOL、健康・栄養状態、食物摂取状況、行動要因、中間要因、準備要因、属性、食環境とした。枠組みの検討は因子分析(最尤法バリマックス回転)にて行った。さらに、算出した因子得点と QOL の関連を Pearson の相関分析にて検討した。

**【調査 2: 結果】**

中学生および高校生では、思春期の特性が反映されると考えられる家族と関わる行動が少ないという結果を得た。結果期待やセルフ・エフィカシーが高いという結果は、調査 1 と同様であった。因子分析では中学生・高校生とも 4 因子で最適解を得たが、小学生の解は得られなかった。QOL と関連のみられた因子は、中学生はスキルおよび副菜摂取に関する因子、高校生はセルフ・エフィカシーおよび副菜摂取に関する因子であった。

**【考察】**

調査 1・調査 2 を通じ、小学生、中学生、高校生のセルフ・エフィカシーは一般の小学生にくらべ高かったことから、スポーツをしている子どもの食生活の特性として、高いセルフ・エフィカシーが考えられた。また、副菜摂取に関する因子が QOL と関連していたことから、スポーツをしている子どもでも、スポーツにとらわれすぎないバランスのよい食事の重要性が示唆された。スキルやセルフ・エフィカシーといった準備要因の因子が QOL と関連していたことから、準備要因から QOL へのパスを検討する価値があることが示唆された。結果期待やセルフ・エフィカシーの回答に天井効果がみられたことから、スポーツをしている子どもの食生活評価には、社会的認知理論以外の行動科学理論を用いることが望まれる。